

文化財をたずねて

No.31

むかしばなしの舞台をたずねて②

発行 赤穂市教育委員会

編集 文化財課文化財係

(赤穂市加里屋 81 TEL:43-6962 FAX:43-6895)

(前号に引き続き、赤穂市内に伝わる昔話と、ゆかりの場所をご紹介します。)

①竹筒で塩を作る人を見た (尾崎)

丸山から御崎への波打ち際を歩いていると、猪壺谷^{ちよつぼだに}という小さな谷間の平地があります。この平地は、山の細道からも、沖からも、草や木が生い茂っていて見えません。

昔、むかしのことです。毎年梅雨があがって、暑い夏になると、何処^{どこ}からともなく、見たこともない人たちが、何家族かやってきて、枯木や草を刈り取って、簡単な小屋を建てて生活を始めます。

ある夏の暑い日に、一本釣りに出た一人の漁師が、猪壺谷の沖で魚を釣っていました。静かな海に、何かざわざわと音が聞こえてきました。漁師は何事だろうと山の方を眺めると、たくさんの男や女、子供たちが、竹筒のようなもので海水を汲んで、これをリレーのように手わたして、奥の谷間に送っているのです。漁師は、「ありゃあ、一体、何者なんや。竹筒のようなものを運んどるが、何しよんやろ」と、不思議に思いながら見ていました。あまりにもたくさんの竹筒が運ばれるので、だんだんうすきみ悪くなりましたが、野次馬根性^{やじうまこんじょう}もてつだって、舟を岩かげに入れて、丘の上へ登り、その人たちのしぐさをのぞいて見ました。すると彼らは、猪壺谷の谷間の平地に、ちょうどお墓の竹の花筒のようなかっこうに切った竹筒に、海水を一杯入れて、すき間もないほど立て並べていました。大人たちは、ぼそぼそと、「海水が満ちたり引いたりするのは、太陽や月の力によるものだ」というような意味の歌をうたいながら、忙しくたち働いていました。

漁師はたまりかねて、そこへ出て行き、「おまはんら、何しよんどな」と、聞きました。

皆だまって顔を見合わせていましたが、一番偉い人らしい老人がやって来て、漁師にていねいに挨拶して、

「私らは、ここで塩を作らしてもろとります。こうして何日か日に干しますと、竹筒の中に氷砂糖のようなシオコリができます。これは、私らの仲間の非常用の塩で、できあがった塩は、国中の仲間に配給するのです。買った塩は、包んで持っているうちに溶けて無くなってしまいます。私らは山の中で生活しておりますので、ミチ(塩)の大きな結晶が必要なのです。私が、仲間のミチを作る、『ミチノカミ』です。毎年来ますので、よろしくお願ひします」

と、話してくれたそうです。



猪壺谷遺跡 (尾崎)

1940年頃に実施された発掘調査で、縄文時代の土器や石器が出土した。現在は隣接して老人ホームが建っている。

② 蛇淵のお薬師さん（有年）

かんかん照りの、ある夏の日です。二人のお百姓さんが、あぜ道に座り、夕焼け空を眺めながら、「あーあ、夕立も来なんだあ。あしたもこの調子だと来うへんぞ」

「はよう雨をもらわないと、田圃の稲がわやや」
「田圃の稲どころか、なにもかんもわやや。川の水も、もう流れとらへんぞ。魚が、日干しになっとんがな」と、ため息をつくばかりでした。

一人のお百姓さんが、「蛇淵のお薬師さんが、雨を降らすんじゃ言うて、昔、雨乞いをしていたと、確かに聞いたように思うが、聞いたことないか」

「なに言うとなや。あの薬師さんは、病気や怪我を治してくれよんやで。雨乞いとちがう、ちがう」

「いや、わしは聞いたことがあるぞ」

その、蛇淵のお薬師さんの話はこういうことです。

「蛇淵」というのは有年原を流れる矢野川にあり、いつも青い水が深くたまり、底が見えず、何とも不気味な深間です。誰いうことなく龍蛇が住んでいるとい、村の人は、怖がり、ここに近寄りませんでした。

元禄元年、大洪水があり、水が引いたあと、蛇淵に、見たこともない石があるのに気がつきました。村の人たちは不思議に思い、

「これは、ただの石ではないぞ。あげて見んか」

と言い出し、皆で引き上げました。

「おや、これはお薬師さんだ」

驚いて、大声で叫びました。見ると、石に刻まれたお薬師さんです。皆が驚き、しばらく見入っていました。

「何と、勿体ないこっちゃ。このまま放っておくとばちがあたるぞ。どこから来られたんか知らんが、ここで、お止まりになったことは、わしらと、ご縁があるんやで」

「ほんまや。おまはんの言う通りや。そまつにはできんぞ。お堂を建てて、皆でお祀りせんか」
と言いだしました。

そして、その夜のことで。お薬師さんが枕もとに立たれ、

「このままの場所で祀れ」

と、お告げがあり、蛇淵にお祀りしました。

それから、何百年もの間、お薬師さんは蛇淵の土手で、雨の日も風の日も、村の人の仕事ぶりをじっと見て、村の人を守ってくれました。

そして、いつの頃からか、「蛇淵のお薬師さんは、雨乞いの願いを聞いてくれる」と言いだしました。



蛇淵の薬師石仏（有年原）

現在は矢野川にかかる蓬箭橋のもとに祀られている。元々はさらに上流にあった。石仏が引き上げられた蛇淵は、河川改修などによって姿を消している。

有年地区はしばしば水不足に見舞われたといい、明治から昭和にかけて牟礼や東有年などの7か所で雨乞いが行われていたという。

昔から、蛇は、水の神様といわれており、雨が降らず、日照りが続き、田圃の水がなくなりだすと、村の人は、お薬師さんを、蛇淵の水できれいに洗って、雨をお願いしました。

幼い頃、お祖父さんからきいたこういう話を、一人のお百姓さんが思い出したのです。「そうか、そんなことがあるんか。昔の人のいうことは、ほんまや。さっそくお薬師さんに皆でお願いせんか」

三日目に大雨が降ったということです。

③^{まつねがわ}狐川の由来（上仮屋）

昔、赤穂にお城ができるまで、付近は雑草が生い茂る浜辺で、そこにはたくさんの狐の家族が住んでいました。

狐たちは、食べ物に恵まれ、誰にも邪魔されず、楽しく、仲よく暮らしておりました。

ところがある日、見慣れぬ人間様が、突然大勢やって来ました。

何事が起こるのかと、草のかげから皆不安げに見ていました。

杭を打つ者、縄を引っ張る者、石を積む者、そして沖には大きな石を積んだ船が来ているのです。

狐たちは、何が何やらわからず、右往、左往するばかりです。どうやら赤穂の城造りが始まったようです。

狐たちにとっては、一大事です。もう自分たちの住むところがなくなるのです。

ボスのコクスケは、だまっておりません。皆を集めました。

「皆、こんなひどいことはないぞ。われわれの住家を、これからこわしてしまうのだ。人間は勝手なことをする。これでは、家族は離れ離れになり、年寄りも死ぬしかない。だまっておれん」

どこかへ住家をはやくかえようと、泣き叫ぶ老狐もいました。だが急にあるものでもありません。なんとか工事を中止してもらおうと、いろいろ意見がでました。

最後にコクスケが、「われわれのことを、少しも考えてくれない人間どもを追い出すために、この工事を皆で妨害しよう」と。

コクスケの決断に、狐の集団は立ち上がり、築



新川（加里屋）



赤穂大石神社合祀殿（上仮屋）

国助稲荷神社は赤穂城三之丸内に存在した神社。「国助」の読み方は、資料によって「コクスケ」または「クロスケ」の二通りの読み方がある。創建年代は明らかではないが、17世紀頃には存在したとみられる。明治42年、加里屋・上仮屋地区に存在した8つの稲荷社とともに赤穂神社に合祀され、昭和24年には大石神社に合祀された。現在、天満宮・淡島神社などとともに赤穂大石神社合祀殿で祀られている。

国助稲荷神社にまつわる昔話は、紹介したもののほかに、大石内蔵助に関連するものも伝わっている。

いた堤をこわしたり、工事用の飲料水の水がめに汚水を入れたり、病人をつくったり、あらゆる妨害を、三年余りも続けました。

赤穂城の工事は、おくれにおくれ、大変な出費となりました。

ついに、責任者は、ボスのコクスケに頭を下げました。

「申し訳なかった。お詫びに何でもできることはします。どうか工事を進めさせてくれ」

しかし、狐たちは余りにも勝手すぎる人間の言うことは聞き入れず、妨害を続けました。

弱りはてた人間どもは、かわるがわる謝罪に来ました。誠意が見えて来たので、ボスのコクスケは聞き入れることにしましたが、条件を出しました。

「上飯屋地区四カ所に、住家の祠をつくってくれること、城の西を流れる川を狐川とすること、この川を、われわれ狐専用の漁場にし、人間には自由にさせないこと」

工事責任者は、コクスケの条件を心よくきき入れました。

その後、コクスケの率いる狐集団は、人間とすっかり仲よくなり、火事の予告や、失せ物の発見等に協力するなどして人間に信頼され、「コクスケ稲荷」「コクスケ大明神」として、大事にしてもらいました。

現在残っている祠は、人目につかない淋しい場所にありますが、「コクスケ稲荷大明神」として町内の信仰を集め、二月の初午の日には、お祀りを欠かしたことがない、と言われてしています。

昔の古地図に「狐川」とある、赤穂城西側を流れている千種川支流は、現在は「新川」と改称されています。

④^{あまこやま}尼子山落城（高野）

今から四百年ほど前、戦国時代のことです。^{あまご(あまこ)よしひさ}尼子義久という武将が、^{こうの}高野の尼子山に立てこもり、^{もうりもとなり}毛利元就の大軍と戦いました。

尼子山は、三方が険しくて、東側は、尾根道がダラダラと佐方のほうまで続く地形です。この尾根道も狭いうえに、何カ所か途切れておりました。尼子山の頂上に行くためには、険しい坂道を登るしか方法はありません。

義久は頂上に城を築き、まわりには高い塀をめぐらしました。そして塀の外には大きな石をたくさん積みかさねておき、頂上に通じる坂道には竹の皮を敷きつめて、毛利の大軍を待ちかまえました。

最初、毛利の軍勢は、一気に尼子城を攻めました。でも、竹の皮で足がすべって思うように歩けず、



尼子山と千種川（高野）

標高約 250 m の山頂には「尼子岩」と呼ばれる巨岩があり、毛利の軍勢に向けて落そうとした、との言い伝えがある。

山頂には尼子山城跡が所在し、連続する平坦面や井戸跡、建物跡が残る。ただし、土橋や堀切など、典型的な山城としての遺構は確認できていない。当時の文献にも登場しない、謎の多い城である。

そこに大きな石が落ちてきたものですから、たまりません。さんざんな目にあい失敗しました。

「何かよい計略（考え）はないか」

と、毛利の軍は相談しました。すると、ある侍が、

「拙者^{せつしや}にいい考えがござる。竹の皮に火を付ければいかがかな。さすれば、坂道でころばず、火事で尼子の軍も混乱いたそう。そこをすかさず攻めれば、城も落ちようものぞ」

といいました。

「そりゃあ、ようござる」

とほかの侍も賛成し、さっそく毛利の軍は準備にとりかかりました。

ところが、竹の皮に火をつけると、きまっ
て空が真っ暗になり、雨が降りだすのです。
火はアッという間に消えてしまいました。

「ほかに、何かよい計略はないものか」

と、毛利の軍は、また相談しました。

そこへ、一人の老婆がやってきました。この老婆は、尼子山の裏の佐方に住んでいましたが、大事な息子を尼子の軍に殺されたため、尼子義久をうらんでいました。

「尾根づたいに城まで行ける道がありまっそ」

と老婆はいいました。

「何を申すか。あの尾根道は狭いうえに、何か所もとぎれているではないか。嘘を申すとただではすまんぞ」

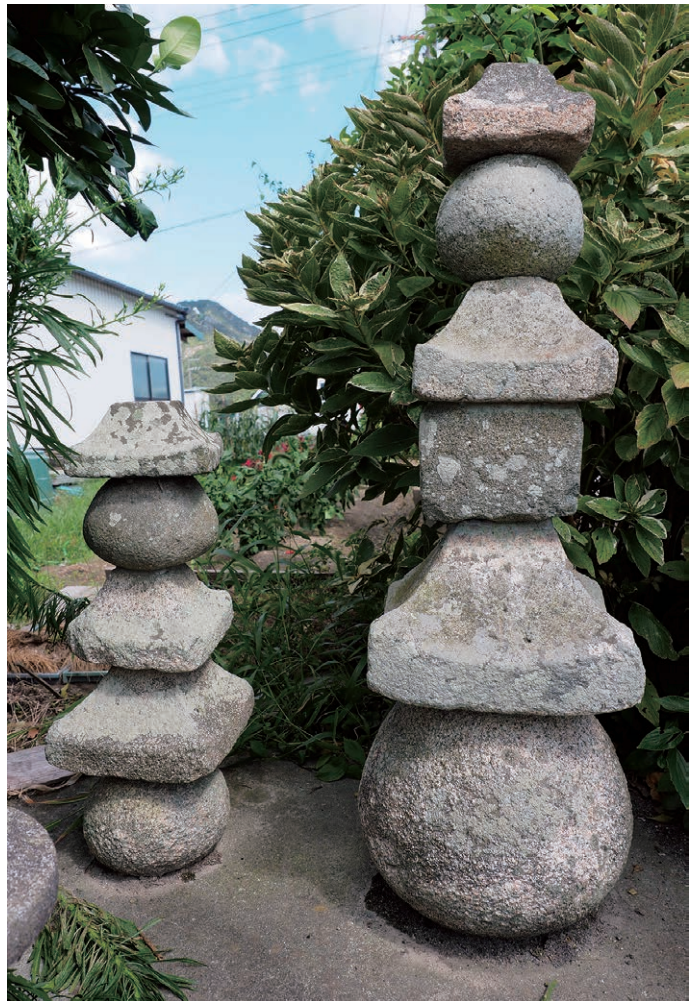
「ウンニャ、ワシしか知らん道がある。この道を教えなかったもんで、ワシの息子は尼子の兵に殺されたんじゃ」

毛利の軍は、老婆を道案内にして、尾根道を調べました。老婆のいったとおりです。城に通じる道がありました。しかも、尼子の軍はこの道に気づいていません。

毛利の軍は夜襲^{やしゆう}を計画して、大軍を尾根道から登らせました。不意をつかれた尼子の軍もよく戦いましたが、全員討死^{うちじ}にし、ついに尼子城は落ちました。その時、はねられた義久の首は浜市まで飛んで行ったということです。浜市の『尼子将軍の首塚』が、そうだと伝えられています。

佐方の老婆が道を教えたということで、その後、佐方の人と高野の人は縁組^{えんぐみ}（結婚）しないというほど、仲が悪かったそうです。

また、毛利軍の火攻めが何度も失敗したことから、尼子山には龍神様が住んでいると噂されるようになりました。そのため、雨が降ってほしい時には、尼子山で雨乞いの行事がおこなわれていました。



尼子将軍の首塚^{はまいち}（浜市）

「尼子塚」^{うねめ}「采女塚」の別称があり、赤松一族の富田采女の首塚とも伝えられる。

元々は数基の五輪塔だったとみられ、道路の拡幅工事などにより、現在地に移された。

⑤石屋の^{みだろく}弥陀六（塩屋）

弥陀六は、毎日毎日、チンカラ、チンカラと、石を割って、赤穂城に持って行ったり、^{とうろう}灯籠をつくったり、なかなかの腕前の石屋でした。

弥陀六の灯籠は、赤穂でも最高のものでした。

今日も弥陀六は、いつものように、魔除けの^{あしなかぞうり}足半草履をはいて、塩屋西ヒジリコの石山に行き、チンカラ、チンカラと、石を割っていました。

気がつくやうと、小さい蛇が、チョロ、チョロと、弥陀六のはいている足半草履に、口を持って来るのです。

弥陀六は、

「コラッ！あっちへ行かんか」

と、つまんで放り投げました。しばらくするとまた、チョロ、チョロとやってき

ます。足をかみつきにくるのですが、足半草履の「つの」(^{はなお}鼻緒のこと)が邪魔になって、かみつくことができないのです。幾度も幾度もかみにくるので、とうとう弥陀六は、おこってしまいました。「ほんまに、このやろう。くっちゃめ(まむし)やないくせに。ひつこいカラスぐつな(カラスヘビ)やないか。ええかげんにせんか」

と、手に持っていたセットウで、ゴツンと頭をたたきました。すると、ドサーッと音がして、あの小さい蛇が、どうしたことか大きな、大きな大蛇(おおぐつな)になりました。でも頭はペッシャンコで、ぐったりしておりました。

「エッ！エー、エライこっちゃ。こいつ、こまいこまい、くつな(蛇)や思いよったのに、大蛇(おおぐつな)が化けよったのか」

弥陀六は、急いで山から下り、このことを話しました。

「あのなあ、弥陀六が、ヒジリコで大蛇を退治したんや。えらいもんや。そらあ、大きいんやてエー、見に行かんかあ」

夏の暑い日、七日七夜、塩屋村の人は皆、見に行き、

「よう、あんな大蛇(おおぐつな)、退治したもんや」

と、感心しました。

ところがだんだんくさってきました。いつまでもここに置いておくことはできないと、大蛇を切り分けて、モッコウで七^か荷半かたいで(担いで)、西のつきあたりの^{みお}水尾に棄てました。

大蛇の胴を棄てた水尾を、いまも「ドウ水尾」と呼んでいます。

大蛇は、いつも来る弥陀六を、何とかしてのんでやろうと考えていたのです。でもこのままの姿では弥陀六は逃げてしまうだろうと、蛇の神通力で、小さく化けていたのです。蛇は、小さく化けても「おれは大蛇だ。人間の一人ぐらい」と、自分の力を過信していたため、殺されてしまったのです。

※セットウ(截頭)：石を切り出す際に用いる金槌の一種。



げんじょの岩(塩屋)

塩屋荒神社の裏山にある花崗岩の巨石。赤穂城の石垣に残る矢穴と同サイズの矢穴が残っており、赤穂城石垣の石材が採取された場所の一つと考えられる。

※モッコウで七荷半：モッコウとは土砂などを運ぶのに使う道具で、縄をクモの巣形に編んだもの。吊り綱に通した棒（天秤棒）の前後を担いで運ぶ。荷は天秤棒で担ぐ量の単位で、一荷は約60リットル。

※水尾：塩田に海水を引き込んだり、上荷舟を通したりするための水路。塩屋地区には、江戸時代に造られた広大な塩田（西浜塩田）が広がっていた。

⑥大蛇と入電池（福浦）

昔むかし、讃岐（香川県）の万濃池に雄の大蛇がすんでいました。この雄の大蛇は、琵琶湖にすむ雌の大蛇が好きで、毎日のように通っていました。

雄の大蛇は、海が荒れている日は空を、波の静かな日は海のうえをわたって、行ったり帰ったりしていました。

いつも大蛇の往復をみていた福浦の村人は、心配でなりません。

「大蛇が、途中で福浦に立ち寄ったらどうしよう」

という心配です。

ついに、福浦の村人が恐れていたことが起こりました。ある夏の暑い日のことでした。小豆島のほうから黒い雲が、福浦めがけて一直線に飛んできたのです。

黒雲は「大泊」と五軒家のあいだの入江

におりてきました。村人は雨戸をしめて、

なかでジーンとしていました。でも何も起こりません。どうやら、大蛇は一休みしただけで、どこかへ行ってしまったようでした。村人はホッと安堵し、いつもの生活に帰りました。

その頃、五軒家には乙姫とよばれる美しい娘がいました。乙姫は気立てもよく、いつもニコニコと笑顔がたえない娘でした。ところが、だんだんと食欲がなくなり、ついにやせ衰えて、病の床にふしてしまったのです。父親や母親は心配でなりません。困りはてているところへ、旅の占い師が福浦を通りかかりました。藁にもすがる思いで、この占い師に乙姫を占ってもらいました。

占いが終わったあと、占い師は母親にいいました。

「娘さんの病はな、大蛇の精にとりつかれた病じゃ。大蛇の精を取り除かんと、いずれ死ぬじゃろう」驚いた母親は、

「何ということじゃ。どうすれば良いのか教えてつかあされ。どうぞ頼みます」

と、何度も何度もお願いしました。占い師は首を横にふって

「残念じゃが、わしの力ではどうにもならんわい。大蛇を殺すより方法はないが、それほどの勇気のあるものはおらんじゃろう」

と、さみしい口調でいいました。

母親から話を聞いた父親も、嘆き悲しみました。

「何と運の悪い娘じゃ。よりによって、大蛇にみそめられたりして」



入電池（福浦）

大蛇がとぐろを巻いて苦しんだため、池の中心のほうが水深が浅く、岸辺のほうが水深が深くなっている、という言い伝えがある。現在は福浦漁港となっている。

父親は涙をながして悲しみました。その時、フツと福浦のはずれに住んでいる、年老いた武士のことを思い出しました。この武士の名前は宮崎刑部みやざきぎょうぶとって、かつて京の都で衛士をつとめていた弓の名人である、という噂です。刑部は都の生活にあきて、自由な生活を楽しむために、福浦に住みついたのでした。

父親の話聞いた宮崎刑部は、長い間考え込んでいました。そして、「それは、お気の毒なこと。及ばずながら拙者が力をかそう。だが、相手は大蛇だ。今すぐに討つこともできまい。十日ほど待ってくれぬか。大蛇の弱点を見つけねばならぬのでな」

刑部のことばを聞いて、乙姫の父親は何度も何度も頭を下げて、帰っていききました。

その日から、刑部は福浦の村を歩きはじめました。福浦の地形や海の状態を調べて、大蛇との戦いにそなえるためでした。とくに、黒い雲が降りた大泊と五軒家のあいだの入江は、熱心に調べました。

乙姫の父親の頼みを引きうけてから、二、三日がたったある夜のことです。浜辺を調べていた刑部が、沖をみると、鹿久居島かくいじまのオーコの鼻のほうから、キラキラと輝く二つの玉が、こちらに向かってくるのがみえました。

刑部は岩陰にかくれました。キラキラと輝く玉は、大蛇の目でした。その大きさは直径1メートルもあるほどでした。刑部が想像していた以上の大蛇です。

大蛇は浜辺についたかと思うと、スーッと消えてしまいました。そして、そこには美しい公達姿きんだちの男が立っていました。公達姿の男は、わきめもふらずに、五軒家のほうに歩いていきました。男が立ち去ったあと、刑部は、大蛇のあらわれた時刻や着いた場所、岩陰までの距離、大蛇の歩く速さなどを念入りに調べました。

そして、家に帰って、いつものように書物を開き、大蛇の急所を確認しました。大蛇との戦いの日は近づいています。刑部は弓の弦つるを強いものに張りかえ、弓矢を念入りにみがきました。

二日後の夜です。この日は月夜でした。刑部は岩陰にかくれて、大蛇がくるのを待ちました。いつもの時刻になると、鹿久居島の方向に黒い雲がみえたかと思うと、二つの大きな目玉が浜辺に向かってやってきました。刑部は左手の弓をにぎり直し、右手に二本の矢を持ちかまえました。

二つの目玉が浜辺に着いた瞬間、刑部は引きしぼっていた弓矢を、右の目に定めて、「パシッ」

とはなちました。矢は、ねらいたがわず、大蛇の目に深ぶかと突きささりました。刑部は書物で、大蛇の弱点が目であることを知ったのでした。大蛇は苦しみのあまり、あばれはじめました。その大蛇



龍神社（福浦）

創建については、昔話の龍退治にちなむとする説のほか、江戸時代に行われた福浦の干拓の際に祀られたという説もある。

「玉よけ神社」ともいわれ、戦時中は兵士の無事を祈願する参拝客でにぎわったという。

龍神社のある元山のふもとは「宮崎」という地名が残り、宮崎刑部が住んだ場所という言い伝えがある。

の左目をめがけて二本目の矢を

「パシッ」

とはなちました。

大蛇は、もがき、苦しみ、大きな身でのたうちまわりました。すると稲光がしたかと思うと雷をともなう真黒な雲が、浜辺のまわりに立ちあがりました。

『ゴロゴロゴロ、ピカッピカッ、ドドドドドッ、ピカッ、バリバリ、バツーン、ドドーン』

大きな音とともに、雷が落ちました。雷が落ちると、あたりは、またもとの静かな浜辺になりました。

あくる日のことです。村人たちが浜辺に集まってきました。驚いたことに、雷が落ちたところに大きな穴ができ、そこに水がいっぱいたまっていました。浜辺に池ができていたのです。その日から乙姫の病も回復に向かっていきました。村人たちは、この池を入電池とよび、乙姫に恋をした大蛇を裏山に祀りました。これが、福浦にある竜神社であるということです。そして、雨が降らない時は、^{たいまつ}松明を持って、入電池のまわりを三回まわると、必ず夕立がくるといわれます。これを村人は「入電池の夕立」と今も呼んでいます。

⑦引き受けたオナラ（有年）

今日は、^{しょうや}庄屋の家の嫁取りです。夕方になると、花嫁さんが来るので、朝からてんでこまいのいそがしさです。

日が暮れた頃、親類の人に迎えられて花嫁さんが着きました。花嫁さんは近所の人たちから、「きれいな嫁はんやな」「ほんまやな。ありゃ、^{むこ}婿はんも幸せもんやな。もうけもんやで」といわれるほど美しい人でした。

式も無事に終わり、お座敷にはご馳走が並べられ、酒盛りが始まります。花嫁さんは、花婿さんの母親に手をひかれ、酒盛りの座敷へ挨拶にでてきました。正面の花婿さんのそばに座りましたが、緊張のため花嫁さんの体はコチコチです。花嫁さんのうしろには、付き添いの女中が座っていました。

仲人・両親の挨拶が終わり、いよいよ花嫁さんの番です。蚊の鳴くような声で、

「よろしゅうおねがいます」

といったまではよかったのですが、おじぎをした拍子に

「ブー」

と、緊張のあまりオナラをしてしまったのです。

さあ、大変。座敷にいる人たちはシーンと静まりかえり、花嫁さんは恥ずかしくて顔が真っ赤です。花婿さんもとっさのことで、どうしてやれば良いかわからず困っています。



有年宿とその周辺（東有年）

写真中央が西国街道。街道の両側に街並みが広がっているのが分かる。西国街道が通る東有年地区は、交通の要衝として栄えた。

その時、花嫁さんに付き添っていた女中が、大きな声でいきました。
「いやあ、すんまへんこって。いとはんのいっしょういちだい一生一代の大事な席で、えらいことしてもた。どうぞこらえてくださいませ」

そして、頭を何度もペコペコさげながら、女中は「プー」とやり、
「いやあ、またでてしもうた」

息をころして見守っていた人たちは大笑い。その後酒盛りはいっそうにぎやかになり、朝まで続いたということです。

※いとはん：「お嬢さん」の意味。

⑧いきしま生島の樹（坂越）

国の天然記念物で名高い島、生島は、むかし、はたのかわかつ なにわ秦河勝が難波（大阪）から逃れ、ここに上陸して「生き神様」とあがめられ、一生をこの島で終わったところでは。

坂越の人たちは、秦河勝を生島に祀り、神社を建て、生島を神域としました。

それからというものは、樹木はもくもくと生い繁りました。樹木を切ると、必ず何かたたりがあるといわれ、誰一人として切るものではありませんでした。

ある時、むこうみずな男が、
「あほな、そんなことがあるか。わしが切ってみるから見とけえ」

と、皆がとめるのも聞かず、生島にある一番大きいあかがし赤檜の木を切り倒し、船のろ櫓を作りはじめました。

「えらいことしてもうたぞ。やめといたらええのに」
「昔から、『木を切るな。落ち葉拾うな』といわれていることを知らんのかなあ。船にたたりがあるわい」

人々は、口ぐちに言い、止めたにもかかわらず、男は生島の木で立派な櫓を作り、皆に自慢し、魚をとりに出ました。

船はすいすいと沖の漁場まで進みました。天気もよくて魚もたくさん取れました。ところが、さて帰ろうと櫓をこぎ始めましたが、一向に船はすすみません。同じ所をくるくる回るばかりです。だんだん日がくれてきました。精魂つきはてた男は泣きながら「助けてくれー、助けてくれー」と叫びました。その日にかぎって通る船もありません。次の日の明け方になって、江戸から帰るかいせん回船に救われて、やっと港に帰ることができました。



大避神社（坂越）



生島古墳（坂越）

生島にある古墳の一つで、秦河勝の墓所と伝わる。島内には5基の古墳が確認されている。

村の人々は、
「ほうれみい、言わんことないやろ。やめとけ言うたのに」

老人たちは口々に、
「生島の^{おおさけ}大避さんのたたりや。はよう櫓^{やしろ}を供えて、あやまらんとあかん」

人の言うことを聞かなかった男も、櫓をお社^{みこし}に持っていき、神様に謝りました。

神社の建物はなくなっていますが、お祭りには必ず神輿（神様）が生島にお渡りになります。

今でも誰一人として生島の木を切ることはなく、ますます生い繁り、生島全体が神秘の雰囲気につつまれています。

※櫓：船をこぐための道具。船の後ろに取り付ける。



生島と坂越湾（坂越）

本誌で紹介したむかしばなしは、赤穂市教育委員会の刊行した『赤穂のむかしばなし』第1・2集に掲載されているものです。掲載にあたっては、一部文章の表現を改めています。



本号で紹介するむかしばなしの舞台